

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.32-2 (通巻94号) 2024.11.29発行

リニューアルオープンから1年 一歩んできた道とこれからの展望

勝村 誠 (立命館大学国際平和ミュージアム副館長 メディア・資料セクター長)

立命館大学国際平和ミュージアムが第2期リニューアルオープンしてから、1年2ヶ月が経ちました。全面的なリニューアルであったため、開館以来、各方面から称賛の声をいただく一方で、とりわけリニューアル前の展示を愛してくださっていた方々からはとまどいの声も伝えられました。しかしいまでは私たちがリニューアルに込めた理念に徐々に共感の輪が広がっていると感じています。

まず原点を確認しますが、戦後の立命館大学は「平和と民主主義」を教学理念に掲げて教育研究活動を展開してきました。一方、京都においては1981年から平和運動を担う市民を中心に「平和のための京都の戦争展」(以下、「戦争展」)が開催され、その成果として膨大な戦争遺品や貴重な資料群が発見されました。

1980年代から90年代の日本では、戦場や銃後での被害と加害にまつわる体験がようやく客観的に評価され始め、沈黙していた人々が自己の体験を告白・告発し、あるいは、口を閉ざしたままこの世を去った方の遺族に残された遺品が発見され始めた頃でした。立命館大学国際平和ミュージアムはそのような「戦争展」の運動と共同して1992年5月19日に開館しました。

ですから、「戦争展」の成果と、その運営を支えた「中野基金」のレガシーを継承することは立命館大学国際平和ミュージアムのミッションであり、第2期リニューアルにおいても変わることのない基本理念です。

1992年に開館した立命館大学国際平和ミュージアムの展示は、おのずと1931年の満州事変から日本敗戦までの戦争体験にまつわる戦争遺品の展示が中心となりました。もちろん、戦後の平和運動や日本の戦争加害に正面から目を向けて展示を構成したことは画期的だったと思いますが、主には「日本人にとってのアジア太平洋戦争」を考える展示であったと思います。

その後、グローバル化が急速に進行し、立命館大学にも国際学生が飛躍的に増え、ミュージアムにも全世界からの来館者が訪れるようになりました。それゆえ、立命館大学国際平和ミュージアムの第2期リニューアルは、「アジア太平洋地域に位置する日本の学園として、歴史を誠実に見つめ、国際相互理解を通じた多文化共生を目指す」(立命館憲章)との理念にもとづき、近代の戦争と平和について総合的に理解できる展示、そして、世代や地域を越えた対話を通じて共感できる展示へと創造的に展開することが求められました。

そのためには、18世紀後半に欧米列強を中心に世界を席巻した帝国主義についての深い理解が必要です。現在のウクライナやガザの戦争にもつらなる視点です。第2期リニューアルの展示は、アヘン戦争からウクライナ戦争まで、大きな因



果関係が理解できるように工夫された展示にしました。

日本については、明治国家の国境画定を起点として、対外的に初めて軍事力を発動した台湾出兵から、琉球処分、日清・日露戦争へと進む帝国主義的拡張政策から理解せずして、アジア太平洋戦争のことはわかりません。テーマ展示1では、日本が戦争を重ねながら植民地・占領地を拡大していったありさまを、そしてそれが現地の人々の生活を一変させたことを、6つの地域に分けて一望できるようにしました。おそらく世界初の画期的な試みであると思います。

このように日本と世界の近現代史を総合的に描くことになった背景としては、学界の研究成果を反映させねばならないとの私たちの使命感がありました。1990年代以降、日本でもアジアの諸地域を研究対象とする研究者が増え、植民地支配責任を問う研究、人の移動に着目する研究、支配された側の被害実態に切り込む研究が重ねられてきました。立命館大学国際平和ミュージアムは大学立博物館であるからには、最新の研究動向を展示に反映させねば存在意義がないと私たちは確信しています。

先だって、9月中旬に京都市内の小学校5年生が見学に来られたのですが、子どもたちは事前に用意されたワークシートに従って真剣に取り組んでいました。私たちが、大学立の博物館として最新の学術成果を反映させるとともに、小中学生の来訪者が多いからといって「子どもを子ども扱いしない」展示を心がけたことについては、私としては一定の成果を出せたのではないかと自負しています。

しかしながら、「小学生には難しくなった」という声が聞こえてくるのもまた事実であり、その声にも真実があるのでしょう。リニューアルは決して完成ではありません。立命館大学国際平和ミュージアムはこれからも教育関係者の声や全世界各地の博物館の実践から学びながら、成長し続けていきます。どうぞ、繰り返し足を運び、展示と対話してください。また、展示に対するコメント、改善意見もいただきたいと思います。引き続きご関心をお寄せくださいますよう、よろしくお願いいたします。

遊心雑記

原発事故から13年経ったが

東京電力は、2024年8月22日、福島第一原発2号機で事故時に溶け落ちた核燃料デブリを数グラム取り出す作業に事故後初めてチャレンジしましたが、取り出し装置のパイプの接続ミスのため中断されました。事故からすでに13年、取り出すべき核燃料デブリは880トン（8億8千万グラム）と見積もられています。2051年に完了する予定の廃炉工程への影響が懸念されます。致死的なレベルの放射線環境ゆえに、作業は全部ロボットがやらなければなりません。特殊な多機能ロボットの開発も必要ですし、本当に全部の核燃料デブリを予定通り取り出せるのか、心配です。

地震と津波で核燃料熔融事故を起こした福島原発では、16～17万人が避難を余儀なくされ、今も戻らない人が3～4万人いると言われます。もちろん、戻っても仕事がないことや、医療などの社会的サービスを受けにくいこともありますが、戻りたくない理由の一つは、事故原発が未だに強烈な放射能を抱え込んだままあり続けていることです。廃炉は被災地域再出発の一丁目一番地ですが、それだけに、初めてのデブリ取り出し失敗は今後への懸念を増長させる事件でした。

先日、福島県の夜ノ森の回転寿司店を訪れる機会がありました。夜ノ森は美しい「桜のトンネル」で有名な街です。長い間「帰還困難区域」になっていましたが、2022年1月に立入規制が緩和され、桜並木が戻ってきました。私が訪れた回転寿司店はもちろん営業していなかったどころか、店内はあの震災の瞬間を冷凍保存したかのよう、そのとき食事中だった人々が使っていた醤油の小皿や湯飲みやお手拭きなど

安斎 育郎（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）

がそのまま散乱していました。そこには、13年経っても目に見える形で震災を今に伝える被災地の姿がありました。しかし、福島には県民が目にするかもしれない核燃料デブリが、放射線という「目に見えない不安」を宿して存在し続けている現実があることも、忘れてはならないでしょう。



福島県浜通りの回転すし店にて（2024年6月8日）

立命館大学国際平和ミュージアムでは、企画展示室（1階）を使用した展示企画を募集しています。

本学構成員や市民のみなさまの積極的な応募をお待ちしています。

2025年度 ギャラリー企画展の 公募が始まりました

展示期間：2025年4月12日^土～2026年1月31日^土

展示会場：立命館大学国際平和ミュージアム1階 企画展示室

応募資格：当館の設立理念に賛同していただける本学構成員、

個人および団体

応募期間：2024年10月15日^火～2024年12月13日^金

※詳しい募集要項や提出書類などはHPからご確認ください。

会場使用料
無料

立命館大学国際平和ミュージアムだより



立命館大学国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University

第32巻 第2号（通巻94号）2024年11月29日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL：075-465-8151 / FAX：075-465-7899

<https://rwp-museum.jp>



HP



Instagram



日本平和博物館会議
Association of Japanese Museums for Peace

今後、特別展のご案内、ミュージアムだより等、国際平和ミュージアムより送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、FAXにて国際平和ミュージアム（075-465-7899）へ送信ください。